

Z06 030 T60
T60 12 17

学問と人生

湯川秀樹博士 講演録

(昭和三十一年十二月十七日

草津中学校講演会において)



私のこれまでのさまざまな体験を通して、
 人生観が、どのようになりかわってきたか
 について、お話をし、みなさんの考えを
 参考にさせていただきたいと思う。
 私には、科学を研究する研究者としての立
 場と、（大学院の学生）大学生を相手とする教育者としての立
 場とがあり、この二様の立場が、（にあっての様々な経験）私の生き方
 ・人生観に大きな影響郷音を与えてきた。
 人間というものは、心身ともに成長し
 ていくべきものであるから、さらに今後、
 私の考えは、変化、発展していくであろうし
 ・またそうあらねばならない。そうしたこと
 を前提としてお話ししたいと思います。
 幼年時代 私の家庭環境
 私の家には、家中あらゆる種類の書物があ
 り、ふれており、私と兄弟は、それをかたは
 から濫読した。なかには子供共によさしくな
 ったものもあつたらうが、そんなことはおま
 りなしに親もそれに対してなんの干渉もしな
 かつた。つまり、家庭環境としては、佳どめ

新聞に連載されている

2

から、
学童になる
生活を楽しんで
小学校時代
当時の勉強は、
家で自習をし
宿題を
宿題というものが
今の子供
は、
型にはま
る。

小学校時代
当時の勉強は、
家で自習をし
宿題を
宿題というものが
今の子供
は、
型にはま
る。

宿題を
宿題というものが
今の子供
は、
型にはま
る。

今の子供
は、
型にはま
る。

型にはま
る。

英雄豪
傑が、
生き
活動して、
素朴な感動を受
ける。

素朴な感動を受
ける。

感動を受
ける。

感動を受
ける。

感動を受
ける。

感動を受
ける。

コクヨ

B4 20x20

中学時代（京都一中）

厭世的、消極的の時期で、今でもさびしく
思われる。スポーツもやり、ひとみに
生活はしていったのだが、どうもみなと一しょ
に騒げない、自分ばかりぼろろと泣いた
感傷的の気持ちだった。

数学にだけは熱中した。幾何、代数の問題
を解くのに、食事するのでも忘れて没頭する
いうこともあった。後年物理学を専攻する素
地を培った時代といえる。

高校時代（三高）

中学、高校を通じて、社会的現象に対して
は、まうたこといっていいほど関心を持たな
かった。物理学にはつきり重点をおいて考え
るようになる。自分の研究への熱意が、未知
の世界を開拓するのだと、希望が湧いて
きて、人生観も次第に積極的なもの
と変わっていった。一方、学生のスナックにも
行って、お茶を飲んだり、それに対してなんの批判も興味
も持たなかった。私に精神の成

長のかたわらであつたことが思いかえされる。

大学時代（京大）

まじめで意欲的であつた。聴けるだけの講義は取んでも聴き、夏休みも返上して研究した。りした。

その後（京都）

卒業後も研究を続けていつか、人の解決してゐない問題を解きたい、りつぱな仕事をしたいと意欲を燃やすと同時に、学問という

もののむずかしさを身にしみて感じるようになった。當時とりくんだ問題は、三十年を経た今も解き得ないむずかしいもので、学校を出たばかりの若者に解けるはずもなかつたが、学問の世界の奥深さを感じては、なんとかしてと自分と立ちうつ日々であつた。そして、研究につきまわりを感じ、心身ともに困

備した時、大阪大学に移ることになつた。

（大阪） 中間子理論の発表
活気ある大阪の空気に触れて、私は、心気

一転し、勇気を出して、問題に対し新しくと
 りくんでいき、なんとか目鼻をつけることか
 できた。それが、いわゆる中間子理論で、年
 の二十六―二十八のころのことである。
 その後、それに関連していろいろの問題を
 解かねばならなくなり、他の若い人たちと一
 しょに仕事をすすめるようになった。
 こうして仕事の上の必要からではあるが、
 人と接触する機会がふえ、これを契機として
 人生に対する目が開けたというか、やはり
 つではあるが、視野がひろくなつていつか時
 代だつた。それまでは、なんでも自分でやる
 主義で、人生とは自分がかかれば生きるかとい
 うことだといつた考え方をしていたのが、も
 のごとくはなんでも協力が必要だ、人生は、そ
 れ／＼特徴をもつた人間が、個性を伸ばしつ
 つ自由に生きていくべきものだ、というふう
 に変わりあつたのである。
 一口でソバ、アメリカへ
 トイツへ行つた時、第一次大戦がはじまり

コクヨ

B4 20x20



、すぐアメリカに渡った。多くの学者に接する機会に恵まれ、大阪での体験に加えて、さらに、人間と人間との関係ということの重要さを思うようになった。

私は、学者として、人間として、アインシュタインを崇拜しているが、その念は、年とともに深まる一方である。中学三、四年ころ来日された時には、ほとんど哲人の関心も持たず、博士に、今日深く傾倒して、自分を見る時、人に対する見方というものが、年とともに、すなわち、自己の生長とともに、よりつりがわり、深まるものがあることを、考えずにはいられない。

帰国後

二十七、入ごろの私は、自分の学説に絶対的自信を持っていた。一つの大問題は自分の力で解けたのだと。世界の学界の多くもこれを認め、くわいたのだと。だが、実験的うらみがかつた。その後、アメリカの学者が、実際に中間子を発見し、世界の学者が、改め

の処理は、所か／＼うまくいかぬという感じ
 しまにおろしている方がた。
 再びアメリカへ
 戦後アメリカへ行つてからは、かなり落ち
 着いて勉強することになった。アメリカ人の
 よく勉強し、よく働くのは、まづ長く感心
 する。決して時間や物を無駄にしな。その
 場その場で、ものごとを、非常なスピードで
 能率よく処理していく。その生活にな
 りんだのがあるが、なん年かのうちは、未
 処理の仕事が重なりたつていき、それが苦
 になつて、神経衰弱気味となつてしまつた。
 この苦痛は、帰国して今もずっと続いている
 がある程度はあきらめるようになってたが。
 一行 ありき
 感づくと、あれこれ
 日本人は、せつめいで公徳心が強い。人に
 迷惑をかかぬというところ、もつと考えな
 水はなごい。アメリカでも経験したこと
 あるが、外人は、集會の時など、とんずら

コフコ

B4 20x20



お心い集まつていても、おしあうなんてこと
 は絶対にはない。交通に時間がかかっても、
 あせうが時を待つ。学問の世界でも同じでは
 ないか。あせうてはいやない。一ばん基
 礎から確実に築きあげていくという、学問方
 法の根本原理においても、日本人は有るべき
 点があるのではないか。いそいでなんにも
 行かぬ時にいそぐのはやめべきである。
 学問研究は、私の望むところであり、人類
 社会の進歩のため役に立つことなのだから、
 と、私はなんの疑いも持たずに研究を進め
 ていくのだ。だが、原子爆弾ができたことを知
 った時には、深刻に悩んだ。科学者も、た
 ら研究し、発明発見すればそれでいいというの
 ではない、そうして得た知識が、人間によ
 つて、人間のためにならぬように。科学
 といふことに責任を持たねばならない。科学
 者の見出した真理は、使ひ方によつて、毒に
 も薬にもなる。しかも、その、ポラスとマイ
 ナスの差は、あまりにも大きい。ビキエの致

一行あり

の灰の事件も、そうした意味で、大きなこと
 だった。科学者の社会的責任というか、
 人類の存続警察に対する責任の重大性を、
 し／＼と感じ、同時に、自分の研究にできる
 地ゆうう二んで、成果をあげようという決意
 をあらわにしつつある。そうして意味で、ア
 インシエタイン博士は、はやくから世界に呼
 びかけられておられるわけであり、つまさらほから
 博士の肉体的えらさを痛感せざるをえない
 こと、また人間として、これおらさるに、
 いくであらうし、また成長していき、
 いと願うところ。私の平凡な人生の憧憬が、
 参考とすれば、まことにしあわせである。

CD21-080-020-010
[206030]60-1]